

1. 研究報告書の構成

序章 研究の概要

第Ⅰ章 研究の問題と所在

第Ⅱ章 実習学校での実践

第Ⅲ章 幼小連携モデルの開発

終章 研究の成果と今後の課題

2. 研究の概要

(1) 問題の所在と研究の目的

小1プロブレムとは学級崩壊とは違い、「学級がうまく機能しない状況」である。授業中椅子にすわることができない、隣の児童にちょっかいを出すなどの症状が見られる。

小1プロブレムの要因は大きく二つあり、一つは社会的要因、もう一つは幼稚園と小学校の段差である。

社会的要因は少子高齢化、核家族化により集団生活や異年齢交流の機会が減少したことによりコミュニケーション能力が低下したことにある。

もう一つの要因である幼稚園と小学校の段差は、カリキュラム、1日の流れ、空間構成等に段差が存在している。

まずカリキュラムは、幼稚園では自由保育を通しての領域教育、小学校は授業を通しての教科教育であり、活動形態に段差がある。

次に1日の流れの段差として、幼稚園の一つひとつの活動の時間は短く主体的に身体を動かしながら活動をしているが、小学校では一つの授業が45分あり、授業によってはずっと座っていなければならない。

そして、空間構成には掲示物や机の有無、敷地の広さなど、多くの違いがある。

幼稚園と小学校で指導の意図やねらいはそれぞれあるが、それらの段差が現代の児童にとっては大きな壁となっており、その段差を小さくしていく必要がある。

(2) 研究の対象と方法

研究の対象は実地研究を行った和田岬小学校である。

研究の方法は幼小連携についての意識アンケートを行うことと幼小連携事業に参加し、事業の様子を観察し、分析を行うことである。

3. アンケートの実施と実習校での幼小連携

(1) アンケートの実施

アンケートの内容は幼小連携についての意識調査であり、幼小連携の現状を把握することが目的である。

アンケートの対象は和田岬小学校職員19名で全クラス担任から校長まで幅広く行う。そして、幼稚園教員は筆者の知人6名に行う。

アンケートの結果、ほとんどの教員が幼小連携は必要であると回答していた。しかし、時間的に余裕がないとも回答している。

幼小連携に関しては、学校によって差が激しく、合同研修や行事の参加をしている学校もあれば、幼小連携をほとんど行ったことがない学校もあった。

(2) 実習校での幼小連携

今回参加した幼小連携事業は就学前検診と幼

幼稚園訪問である。

1つ目の事業が、就学前検診である。入学前の幼児が保護者と健康診断を受ける。保護者との会話の様子、児童の一举一動を観察し、実態把握を行い、来年度のクラス編成に生かす。

2つ目の事業が幼稚園訪問である。訪問先は小学校近くの私立幼稚園である。幼稚園訪問の目的は、入学予定児童の人数把握と児童の実態把握である。連絡会には副園長が対応し、家庭環境や児童の性格、教員の支援方法等、一人ひとりの幼児について細かく話し合った。

4. 幼小連携モデルの開発

(1) よみ聞かせや手遊びの導入

授業の導入や場面の切り替えのきっかけとして取り入れる。授業の妨げにならないように5分以内で尚且つ簡単にできるようにものを用意する。よみ聞かせには持ち方等の練習が必要である。

(2) 歌の導入

朝の会や帰りの会等で歌を歌い、学校生活を楽しむきっかけにする。幼稚園でも歌っていたような歌を用意する。児童も知っている簡単な曲が良いが、伴奏の練習が大変であるのでCD等の音源を用意する工夫が必要である。

(3) 空間構成の工夫

小学校は幼稚園に比べて広く迷いやすい。そこで各教室の扉にイラストや教員の顔写真入り看板を用意して、児童の不安を取り除く。

教室は、綺麗に明るい雰囲気をはり、児童の成長を感じられるような掲示物を貼る。しかし、あまり掲示物が多いと児童の集中の妨げとなる。

(4) 職員同士の交流

小学校には複数の幼稚園から幼児が入学して

くる。そのため、複数の幼稚園との交流は小学校側に負担がかかる。

そこで、月に一回小学校に幼稚園教員を招いて交流会を行う。予め日程と時間を年間計画として立てておけば時間をとりやすい。

交流会の利点は、直接顔を合わせるので手遊びや歌の指導を直接受けることができる。

しかし、複数の幼稚園との交流になるので個人情報取り扱いには注意する。

(5) 幼小連携連携モデルの注意点

本研究のモデルは小学校1年生が学校生活に慣れるまでのモデルである。長期的に続けることは幼稚園に依存する形となり発達の妨げとなる。しかし、職員の連携は児童理解のために続けていきたい。

5. 研究の成果と課題

今回の研究では、アンケートや幼小連携事業の参加によって、現場の声や幼小連携の現状を知ることができた。幼小連携についてだけでなく、小1プロブレムについてのアンケートを行ないたかった。

また、発達段階や心理学の視点から、児童理解を深め、小1プロブレムにアプローチしていきたい。

1年生の児童と見るだけではなく6年間生きてきた人間として理解を深め、一人ひとりに合った支援を行う必要がある。児童理解のためには幼稚園との連携は必要不可欠である。

修学指導教員 小学校教員養成特別コース

大西 久